

3) 爬虫類

①概説

日本産の爬虫類は、カメ目（カメの仲間）と有鱗目（トカゲやヘビの仲間）がある。

カメ目のうち、海産のカメ類は、たまたま、魚網に誤捕獲されたり、漂着したりすることがあるだけである。また、陸産のカメ類は、ペットとして移入されたもので、県内で継続的に繁殖した記録は見られないので、「青森県レッドデータブック2020年改訂版」では、これらのカメ類は本県産の爬虫類の対象として取り扱わない。青森県のカメ類について、和田（1965）は、東北地方では稀で、青森県には天産しない、海産のカメは、海流によって南方より本県近海に現われ、近海または汽水湖の魚網にかかってとらえられ、標本はアカウミガメが多く、オサガメも保蔵されていると述べており、また、陸産のカメ類については、青森県には緯度的に淡水カメ類は天産しない、愛玩用として飼育されているものは、イシガメとクサガメの2種類があると述べている。著者（笹森）は、クサガメ2頭を捕獲したことがあるが、いずれも甲羅に紐を通す穴が開けられており、ペットとして飼育されたものが放されるか、逃げたものである。

本県には、トカゲ目の4本肢があるニホンカナヘビとヒガシニホントカゲの2種と肢がないヘビの仲間が7種生息している。2010年改訂版（青森県, 2010）の爬虫類分野では、Aランクにタカチホヘビ、Bランクにシロマダラ、ヒバカリが選定されている。

今回の2020年版では、青森県に分布する有鱗目の5科9種を対象として検討し、ヘビ類のタカチホヘビ、シロマダラ、ヒバカリをDランクに選定した。2010年改訂版では、記録が少ないことと県内環境の変化を挙げていたが、記録が少なかったのは爬虫類を重点対象とした調査がほとんどなく、他調査時（両生類や哺乳類等）の観察を記録するだけであったと考えられる。爬虫類に特化した調査を行った記録（塚本, 2016）からも、記録が少ないから希少な種とするのではなく、十分な分布調査を行って判定することが重要であると思われる。

本県に生息するトカゲはヒガシニホントカゲで、本州の近畿以東と北海道に分布し、ニホントカゲは近畿以西に分布する。山野を踏査してよく観察されるのは、ニホンカナヘビで、ヒガシニホントカゲを観察するのは難しい。漠然と青森県では生息数が少ないと思っていたが、文献等を整理してみたら、県内各地での記録がある（笹森, 2014）。今後、未記録の地域で調査が進むことでくわしい分布域が解明されることを期待したい。ニホンヤモリについては、図鑑等の分布地図には本県も生息範囲に含まれていたり、分布に本州と記載されていたりしているものもある。しかし、本県ではニホンヤモリの生息が確認されたことはない。

環境の変化の影響については、水田の乾田化にともなって、水田に多い両生類が激減したため、カエルやオタマジャクシを採食するヤマカガシやシマヘビ、ヒバカリなどが水田でみられることが少なくなった。複数の農業者が、「圃場整備する前にはブッシュクリーナーで草刈をしていると蛇を切り殺すことがあったが、圃場整備後は、ほとんどない。」と話している。

一方、山地は、燃料を木材に依存していた時代から石油等の化石燃料に代わって、また、農業の機械化が進んで、薪炭林跡地や採草地には、広葉樹や植林されたスギが繁茂してきた。森林に生息する爬虫類にとっては生息環境が良好になってきたものと思われる。しかし、近年、風力発電や太陽光発電の設置が県内各地で行われており、それに伴う設置後の影響や環境保全については十分検討されているのか憂慮される。

本県の爬虫類の分布状況については、ほとんどの種のくわしい調査が不足している。詳細な分布調査が進められることにより、生態系の一員としての爬虫類の保全対策への取組ができるようになると思われる。

（笹森耕二）

②本文

トカゲ目 ヘビ科

D

和名 タカチホヘビ

学名 *Achalinus spinalis* Peters

環境省：該当なし

全長は30～60cm、本州・四国・九州とその周辺の島嶼。体鱗はビーズのように丸く立体的に盛り上がり、つややかな光沢がある。鱗が重なることがなく乾燥にきわめて弱い。…背中線上の黒いラインがはっきりと尾端まで入る（内山ら, 2002）。

本県が北限。本県では岩崎村（現深浦町）十二湖の記録（秩父, 1950）だけであったが、近年、各地で記録されてきた（向山, 2009）。2010年以降では、爬虫類に特化した調査によって生息が確認されている（塚本, 2015；塚本・丹羽, 2016）。しかし、全県的には確認記録が少ない。今後の調査で分布と生態の把握に努めることが重要である。

（笹森耕二）

トカゲ目 ヘビ科

D

和名 シロマダラ

学名 *Dinodon orientale* (Hilgendorf)

環境省：該当なし

全長30～70cm、北海道から沖縄の諸島まで広く分布している。背面は灰色もしくは白褐色で黒い横帯がバンド状に入る（内山ら, 2002）。

青森県 R D B 2010年改訂版では、本県の確実な記録が少ない（向山, 2002）とされているが、2010年以降、低山地から山地まで記録されている。また、轢死体も数地点で記録されている（塚本, 2015；笹森, 2016, 2017a）。爬虫類に特化した調査で、分布と生態の把握に努める必要がある。

（笹森耕二）

トカゲ目 ヘビ科

D

和名 ヒバカリ

学名 *Hebius vibakari vibakari* (Boie)

環境省：該当なし

全長40～60cm、本州・四国・九州・佐渡島等に分布。森林から平地まで幅広い環境に生息。背面は褐色または黒褐色。口角から後頭部にかけて、斜めに淡黄色の帯が入る（内山ら, 2002）。

本県が北限である。本県では、南八甲田山系の複数の記録（和田, 1965；デーリ－東北, 2002；笹森, 2017b）。また、深浦町・下北半島（向山, 2010, 2012）、弘前市郊外や深浦町での調査（塚本, 2015）等、低山地から山地まで記録されている。しかし、本県全域での記録は、まだ少ない。今後の調査で分布と生態を把握することが求められる。

（笹森耕二）

③引用文献

- 青森県 2010. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. 335pp.
- 秩父志行 1950. 青森県のタカチホヘビ. 採集と飼育, 12(7): 211.
- デーリー東北 2002. 幻のヘビ「ヒバカリ」, 2002年9月19日八甲田山・十和田を愛する会宮本健一氏写真. 東奥日報, 2002年10月3日掲載
- 向山 満 2002. 青森県西目屋村で拾得されたシロマダラ *Dinodon orientale* の記録. 青森自然誌研究, 7: 78.
- 向山 満 2009. 青森県深浦町におけるタカチホヘビとヒバカリの記録. 青森自然誌研究, 14: 75.
- 向山 満 2010. 青森県尻屋崎におけるヒバカリの記録. 青森自然誌研究, 15: 22.
- 向山 満 2012. 青森県におけるヒバカリの新しい産地と同一地点での確認. 青森自然誌研究, 17: 14.
- 笹森耕二 2014. 青森県のヒガシニホントカゲ *Plestiodon finitimus* の記録. 青森自然誌研究, 19: 30-32.
- 笹森耕二・大瀬将司 2016. 青森県のシロマダラ *Dinodon orientale* の新産地と文献. 青森自然誌研究, 21: 91-93.
- 笹森耕二 2017a. 青森県のシロマダラ *Dinodon orientale* の新産地. 青森自然誌研究, 22: 50.
- 笹森耕二 2017b. 青森県のヒバカリ *Hebius vibakari vibakari* の新産地. 青森自然誌研究, 22: 42.
- 塚本誠太 2015. 青森県における希少蛇類の記録. 青森自然誌研究, 20: 12-14.
- 塚本誠太・丹羽奎太 2016. 岩木川上流地帯の爬虫両生類相. 青森自然誌研究, 21: 72-76.
- 内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎 2002. 日本の両生爬虫類. 平凡社, 東京. 335pp.
- 和田干蔵 1965. 青森県の爬虫相. 青森短期大学紀要, (3): 14-15.